

会 議 録

会議の名称	令和6年度 第2回茨木市文化振興施策推進委員会
開催日時	令和7年3月27日(木) (午前・ <u>午後</u>) 3時00分 開会 (午前・ <u>午後</u>) 4時30分 閉会
開催場所	市役所南館3階 防災会議室
委員長	出口委員
出席者	池上委員、川本委員、雨森委員、常盤委員、出口委員、飯嶋委員、 落合委員、木村委員、原田委員、宮崎委員 【10人】
欠席者	平田委員
事務局職員	中井市民文化部長、今西市民文化部次長兼文化振興課長、 松本文化振興課長代理、能勢文化振興課主幹兼政策係長、 秋本文化振興課主査 【5人】
開催形態	公開
議題(案件)	(1) 「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について (2) その他
配布資料	(1) 次第 (2) 「アートカフェをつくろう！」実施報告(第4・5回) (3) 第5回イベント案内チラシ (4) 絵本「かがやくところへ」 (5) 令和6年度「つどい、つながる文化の会議」の事業評価報告書案
傍聴人	なし

発言者	発言内容
事務局	本日は、公私何かとお忙しい中、ご出席及びリモートでご参加いただき、感謝申し上げます。ただ今より、茨木市文化振興施策推進委員会を開催する。 それでは、出口委員長、議事進行をよろしくお願いします。
出口委員長	それでは、会議次第に沿って議事を進めさせていただく。 では最初に、委員の出席状況について事務局から報告をお願いします。
事務局	それでは、委員の出席状況を報告する。全委員は11人であるが、平田委員からご欠席のご連絡をいただいております、本日、ご出席の委員は10人ということで、過半数の出席をいただいているため、茨木市文化振興施策推進委員会規則第6条第2項により、会議は成立している。 また、本委員会は、原則、会議録及び会議資料も含めて公開で運営することといたしましたので、前回と同様に傍聴者には事前に入室していただくが、傍聴の申込がなかったため、このまま進めさせていただく。
出口委員長	会議次第に沿って議事を進めるが、会議の終了は、午後4時30分を予定しているので、ご協力のほど、よろしくお願いします。 まず、案件について事務局から説明をお願いします。
事務局	本日は案件が2つある。1つ目は「令和6年度『つどい、つながる文化の会議』の事業内容について」、2つ目は「令和6年度『つどい、つながる文化の会議』の事業評価報告書について」である。まず、1つ目の案件「令和6年度『つどい、つながる文化の会議』の事業内容について」、説明する。 【第4回・第5回の事業内容の説明】
出口委員長	各委員の皆様、ご意見・ご感想などあるかと思うが、次の案件の説明ののち、まとめてお話しいただけたらと思う。 それでは、つづけて、案件2「令和6年度『つどい、つながる文化の会議』の事業評価報告書について」、説明をお願いします。
事務局	【事業評価報告書の説明】
出口委員長	ここで、報告書を作成いただいた専門部会委員のお二人から、事務局からの説明に対して、補足等あればお願いしたい。 また、前提として、参加型評価ということになっているが、実際にこの文化

発言者	発 言 内 容
常盤委員	の会議の中に参加したのか、イベントを第三者的に見ていたのかについても伺いたい。会場にいらっしゃる常盤委員から願います。 本事業において、参加できたのは最後の第5回のイベントのみで、第1回から第4回については、参加者のアンケートのみを拝見している。また、第5回のイベントについては、基本的に中で運営をするのではなく、一來場者と同じ立場で、朗読劇を聞いたり、ワークショップに参加したり、アートマップに書き込んだりさせてもらった。参加者のほか、受託者である運営側スタッフに声をかけさせていただき、話を伺った形となる。 事務局からの説明に対する補足については、説明いただいた内容が全てになるが、大前提としてお伝えしたいのは、とても良い本番であり、すごく居心地がいい空間であったということ。それは、参加者である「ごちゃの間ファミリー」の皆さんが作りあげた空気感だと思われ、来場者とどのように関わるかという点を相当意識的に考えられ、つくられた空間であったと感じている。参加者のチームワークについても、おおむね事務局から説明があった自己評価の通りである。私自身、このような取組において、まずは参加者が達成感を感じることが大事であると思っており、参加者の様子を見てみると、それは達成されていたと感じる。 なお、あらためて今回の事業評価報告書の対象はあくまで事業ということなので、例えば、本番の出来不出や演奏と朗読のより良い組み合わせ方など、参加者が実践したこと自体がどこまで良かったかということよりは、そうした本番が作り上げられたプロセスを設計した事業に対しての評価だと考え、この報告書を書かせていただいた。さらに、受託者からは、事業に対する思いやイベントの中でこだわられた部分などは、直接伺うことができていない中での所感であるので、今後受託者と対話する中で変わっていく部分はあるかと思っている。 また、参加者へ実施されたアンケートにおいて、「イベント自体は良かったけれど、わかりやすいイベントではなかったかもしれない」との課題感を感じられた意見があったが、それに対して、「伝えるべき内容を諦める」のではなく、「どのようなことを来場者に伝えたかったか対話し、それを来場者に伝えられるところまで次は頑張ってみよう」というように、あくまでコンセプトを大事にしていけるようなコミュニケーションを参加者自身ができればそれを見守ってあげたいと思うし、そうではないときは、市や受託者の職員がその部分を支えられる関係性がよいのではと思う。 最後に、今後、「つどい、つながる文化の会議」が茨木市文化振興ビジョン（第2期）において、推進の基盤として位置づけられているということなので、本事業とビジョンとの接続をどう考えていくかも極めて重要かと思っている。 例えば、宮崎委員の報告書中5-3における「継続的にコーディネーターが活躍していける環境も大事ではないか」に関連するが、ビジョンの各理念1～3を代表す

発言者	発 言 内 容
出口委員長	るような事業がすでに茨木市にはあると思うので、その事業やその担い手と繋いでいくようなことが、ビジョンと連動していくための一つの足がかりになるのではないかと感じている。 先ほどの常盤委員の説明でも出てきたが、報告書に登場する用語について、ここで整理をさせていただく。 まず、この「つどい、つながる文化の会議」は、公募で集まった市民の方々が、全5回活動を行った。この方々は、「参加者」という表現になっている。 次に、「ごちやの間ファミリー」という表現が出てきたが、この名称は、参加者の集まり自体のことをいい、5回の活動の中で話し合われ、決定されたものである。 次に、報告書中で、「受託者」という表現が出てきたが、これは業者のことである。市職員と受託者が運営側となる。 最後に、「来場者」について、第5回のイベントの際に、たまたま来られた子ども連れや学生など全く関係のない顔見知りでない方々を「来場者」という表現になっている。 つづいて、宮崎委員にお願いする。
宮崎委員	オンラインで失礼させていただく。私は、最後の第5回のイベント本番には参加ができていないが、代わりに第3回目の、コンセプトブック（絵本）のアイデア出しの回に参加させていただいた。その際、傍聴者・傍観者として参加したので、実際に参加者と何か一緒に作業をするということではなく、あくまで外から見ているという感じであった。 報告書に関して付け加えることはないが、本事業がコーディネーターの育成を目的としているということで、「文化的コモンズ」や「コーディネーター」について、非常に広い概念の話であり、人によっては解釈が異なりかねないようなテーマであるので、どれぐらいの人たちが具体的なことを思い浮かべられるのかということがとても気になっている。今回、一つの答えを市や受託者から提示するのではなく、参加者が集まり、作業しながら考えるというプロセス自体は、本事業の成果であったと思う反面、常盤委員も報告書の中で指摘しているとおり、第3回の活動の様子と報告書の内容を見ていて、「文化的コモンズ」や「コーディネーター」の役割が明確にされないまま最後まで進んでいたのではと思われた。ただ、最初の段階として、参加者全員でやりながら理解を深めていくという流れを踏まると、一つのプロセスとしてはありなのではと思える。 そもそも「文化的コモンズ」や「コーディネーター」がどういう役割なのか、なぜそれが求められるのかについて、この委員会の中で話し合ったほうが良いのではと考える。その理由としては、今回作成されたコンセプトブック（絵本）の説明の

発言者	発言内容
出口委員長	中にあるコーディネーターの役割を見ていると、アーティストが作った作品の意図を、作品を見に来たお客さんに通訳・橋渡しをするイメージで描かれている。この役割は、たしかにコーディネーターの根本的な部分でもあるが、文化的コモンズの中でのコーディネーターの役割というのは、そこからさらにはみ出るところで、もっと大きく広い意味での社会と文化芸術活動を繋げる役割を意識したものではないかと思っている。 従来、文化芸術活動とりわけ芸術活動と言われるものは、プロの方々が演奏であったり創作をしたりすることに対して、お客さんや愛好者という享受者がいて、双方向で成り立っているが、そういった享受者である人たちだけのために文化芸術に触れる機会をつくるとなると、税金を投入するための説明責任を果たすことは難しいので、文化芸術活動にも社会性や公益性が求められるようになった。ただ、文化芸術活動は、社会課題を解決するためにあるものではなく、地域貢献をするためのボランティアでもない。だからこそ、そこにコーディネーターが入って、文化芸術活動の本質的な価値を守りつつ、享受者だけではなくもっと幅広い人たちと文化芸術活動を繋いでいくことで、通訳をしたり、架け橋になったりしていくものなのかなと思われる。 その辺りの大枠の解釈やコーディネーターの役割について、この委員会並びに市の職員及び受託者の方々がちゃんと押さえておかないと、文化芸術の愛好者などの何かやりたい人たちが何となく集まり、何かイベントをして楽しかった、で終わってしまうような気がしている。今年度については、3年間のプロセスの最初の部分なので、それはそれでいいのかもしれないが、今後さらに発展的にやっていくのであれば、コンセプトや方向性というものをしっかり持っていなければならないと、危機的な意識を持っている。報告書の中に記載させていただいているが、本事業において、アートカフェを作ることが目的ではなくて、あくまで手段であるということだけは理解しておいたほうがよい。 専門部会委員のお二人につきましては、お忙しいところ参加までいただき、しかもこのような報告書まで書いていただき、本当に感謝申し上げます。 前回の委員会であった市長からの諮問に基づいて、これを答申しなければいけない。諮問事項は、「つどい、つながる文化の会議」の事業評価ということなので、それをサポートする行政側のことがメインとなるが、実際全く知らない市民が集まり、たった5回の中でこの絵本やアートカフェを作り上げたわけなので、ビジョンにおける文化の会議の位置づけや文化的コモンズの形成という目標を踏まえると、公募で集まった参加者のことについても答申に含めるべきではないかと考えている。 そこで、委員の皆様からは、運営に対する評価はもちろんのこと、参加者の方々のことについてもご意見やご感想などを率直に言っていただけたらと思う。

発言者	発言内容
池上委員	実施報告書及び参加者アンケートの結果を拝見したが、参加者の意識がとても高い結果が出ており、今後の事業展開として、とても貴重で、期待ができる意識醸成に繋がっていると感じている。 それも、受託者や市の方々のサポートあってのことだとは思いますが、専門部会委員の方からあった色々なご指摘についても、事業を進める中で詰めながら、進化させていけば、目標である地域を巻き込んだコーディネーターの育成に繋がっていくのではないかと感じ、とても良いイベントを開催されたのだという感想を持った。
川本委員	実施報告書を読ませていただき、初年度で一事業をやり遂げたということは非常に素晴らしいことだと思った。何事も初めの一步が一番大変で難しいことであるが、達成できたことで次の方向性を決められるベースになるものができたのではないかなと思う。 一方で、一市民からすると、主体的にコーディネーターとしてやっていくには入口の部分の敷居が高いのではと感じた。コーディネーターとしてやっていきたい気持ちがある人が、例えば子育てでどうしても時間的に制約され、参加したいけど難しいなど。私自身、子どもを育てながら、何か実際に参加してみたいと思った時、時間的な制約により参加を諦めることがあるため、参加者アンケート結果でも同様の意見があることに共感した。子育てに限らず個々人の事情により、そのような制約が付きものであると思われる。 話を聞きながら思ったのは、学生時代の部活動やサークル活動のように、おにクルに何か一つ拠点があって、いつ行ってもそこで活動ができて、年間に数回何かイベントをやっていくような形がとれたら、気軽に参加しやすくなるので、もう少し敷居は低くなるのではないかな。一方で、専門部会委員の二人のお話を聞いていると、この形が活動のレベルとして十分ではないのかもしれないと思ったので、どのような形がベストであるかは考えものである。
雨森委員	常盤委員と宮崎委員、本当にお疲れ様でした。私が懸念している部分が言語化され、報告書に記載されていたので、私から付け加えるとなると、宮崎委員がおっしゃったように、コーディネーターの目指すところやイメージについて、もう少しこの委員会で話していく必要があると感じている。市民のコーディネーターとプロフェッショナルに仕事として担っていくコーディネーターというのを分けて話す必要がある。もちろん混ざる部分もあるが、やはり役割は違ってくると思うので、そういった部分を話すことができれば、どこを目指すのか、どういう人たちに参加して欲しいかという部分がもう少し見えてくるのかと思う。 もう一つ、今回の参加者がどのような人たちだったのかという点も、政策としての事業評価に繋がるかと思われる。どのような人に来てほしいのかという目標があ

発言者	発言内容
事務局	って評価できることなので、今回の評価に組み込むことは難しいかもしれないが、参考までに今回はどのような方が参加されていたかお聞きしたい。 雨森委員のご質問に対して事務局より回答させていただく。今回の参加者について、総勢で23名の方が参加いただいた。まず、参加していただきたいと思っていた方については、幅広く募れたらと思い、文化芸術に興味がある方もそうではない方も参加いただければと想定していた。 実際に参加された方は、現代美術展に出展されている方、絵本作家の方、音楽をされている方など、文化芸術に関わりがある方が、大体の肌感であるが3割ぐらいであった。また、もともと文化芸術に興味はあったが、今回のような企画に参加したことがないという方や、人見知りでこういう場は苦手だが今回初めてチャレンジしてみるという方もおり、当初の想定である文化芸術にあまり関わったことのない方も参加してもらいたいという部分はうまくマッチしたのではと思っている。
木村委員	参加される人が主役なので、彼らの持っている個性というか、彼らがやりたいと思うことをやりやすいようにできれば、成功すると思う。なので、こういうふうにこっちに持って行くなどを考えるのではなく、自らが持っている力を発揮してもらえよう進められれば、コーディネーターとしても大成功であると、私は思う。 ともかく主役は参加される人なので、それを推し進めていけば、何か面白みができていくのではないかと。私は、芸術をつくる立場なので、余計にそう思うのかもかもしれないが、こうしなさいではなくて、彼らの持っているものを発揮できる場を作ってあげられることが良いのではないかと思います。
飯嶋委員	木村委員がおっしゃったように、自らが持っているいろんな才能が開花するような催し物にしていければよいということに大賛成である。都市災害やコロナなどの不測の事態に起きた際、地域に根ざした歴史や文化芸術には、早期にマイナスをプラスに変えられる力があると思っている。大切なのは継続していくこと。その意味でも「ごちやの間ファミリー」のキャッチフレーズは大変ユニークで「面白そう」と思ってもらえるきっかけとなるように思う。コミュニティセンター等とも連携して活動を知ってもらうことで、多くの方々に参加して頂き、又、本格的な生演奏を聴いてもらうなどの体験にもつながって行けたらと思っている。
落合委員	私からは大きく分けて2点ある。1点目は、出口委員長もおっしゃっていた受託者とは誰なのかなど、言葉の部分である。この報告書を読んだときに、受託者であったり、9ページには委託会社という表現が出てきたりして、このプロジェクト全体で、どういう人やどういう団体が構成されているかがわかるものがないので、事業評価報告書もしくは実施報告書の中に、わかりやすい図があると読みやすいかと

発言者	発言内容
	思った。 次に２点目は、コーディネーターあるいはコーディネートという表現について、かなり広い意味で何となく言葉が使われている感じがしている。「つどい、つながる文化の会議」という名称のとおり、まず今回参加した人たちは繋がったので、目的は達しているかと思われる。色々と評価をいただいたとおり、うまくいった部分といかなかった部分があるが、初年度の取組としては、繋がられた、すなわちコーディネートされた人たちが今度はコーディネートをする側に回っていくという意味では目標は達成されたのではと思う。その中でも、企画部・デザイン部・ブランディング部・イベント部というように得意分野にわかれて、各部がお互いに助け合っているところで、それぞれが何かしらのコーディネートをする行動をできていて、自分たちも気づかずにコーディネートし始めているということが起こっていたということを事業評価報告書から読み取った。 先ほどの広い意味でというところに立ち戻ると、今回このコーディネートという言葉の中に、アートマネジメント、イベントプランニングやデザインなど、いろんな要素が入っていて、それが各部に分散しているが、必ずしも全てを得意にならないといけないというわけではなく、別に全部できなくてもコーディネートができるということもあると思うので、そこを踏まえて、今後、次は何をするか、また別の機会ではどうするかというのをそれぞれ深掘りしていくのが良いのではと感じた。 本事業がコーディネーター養成講座であれば、それに応じたご意見があるかと思うが、今回諮問を受けている内容は「つどい、つながる文化の会議」であるので、落合委員がおっしゃったつどい、つながったかという点が、評価のうえで一番大事なポイントで、落合委員から報告の内容を踏まえてその点が達成されたとの感想が述べられたことは、大事な指摘であったのではないかと思います。 本事業をとおして、何か一つ入会地のようなものが出来上がったと理解されているのかどうかについて、実際に最後の５回目に参加された常盤委員からご意見を伺えたらと思うがいかがか。 実際に現場を見てみて、朗読、色塗り、マップ作りのエリアがあったが、それぞれがバラバラではなく参加者同士が互いに話し合いながら、お客さんを誘導されていた。他の委員の方の意見でも出ていたように、元々お互い知らなかった者同士が、本番では一緒に連携しながら、来場者に話しかけに行くなどして、イベントを運営できていたように実感している。 参加型ということで、現場の空気感は、我々にはない非常に貴重なご意見だと思う。それでは、最後になるが、原田委員にお願いしたい。
出口委員長	
常盤委員	
出口委員長	

発言者	発言内容
原田委員	私も受託者などの資料中の記載について、組織図のようなものがあれば、もうちょっとわかりやすかったと思う。また、今回のコーディネーターの育成や確保ということは、本当に大事になってくる分野だと思うが、この短期間でよくやり遂げられて、参加者の方には本当にお疲れ様でしたと感じる。 組織における実践となると、やはり場数を踏むことが大切だと思う。1回やってみて、そこからまた違うものを、1週間後でも2週間後でもいいので、実践させてあげれば、もっと違う成果や感じるがあったと思う。そうすれば、来場者の中にもリピーターができるなど、今回、回収できなかった来場者アンケートももっと集められたのではないかなと思う。コンセプトブック（絵本）に関しても、時間的な制限があったかもしれないが、もう1冊2冊見ることができれば、始めから比較した進化した部分など色々なことを感じられたかもしれない。1回の実践だけでは、評価のための変化を推しはかることはなかなか難しいかなと感じたところである。
出口委員長	皆様ありがとうございます。他の委員の方や事務局から何か補足などあれば。
雨森委員	原田委員のお話を聞いて、本当にコーディネーターが育っていくには場数経験だと思うが、それもやはり市民の活動としてのコーディネーターの役割と、プロフェッショナルのコーディネーターの役割では、また別の実践の場があるかと思うので、実践の場として、地域の公民館やコミュニティセンターに行くなど、何か学ぶの場だけではなく実践の場に行けるようなプログラムを次年度考えても良いかと思う。
常盤委員	川本委員の方から、「いつでも参加しやすい活動の形では活動のレベルとして十分ではないのかもしれない」との発言があったが、私は全く逆だと思っていて、本当にそれぞれやりたい人ができることをできる範囲で持ち寄ることが非常に大事だと感じているので、参加者の中には「なかなか参加できなくて申し訳なかった」という反応もあったが、その人も途中で辞退せずに最後までやり遂げられたこと、それが本当に素晴らしいことなのである。それを「なんで私はここまでやっているのにあなたはやらないのですか」となると、やはり何か大事なものがなくなってしまうので、空気感や関係性をちゃんと作っていける場作りが非常に大切なのであると思っています。今回の活動においてその可能性が見えたので、すごく素敵であったと感じている。
出口委員長	私からも今回の評価について一言申し上げたいと思う。どのような評価の基準を置くかにもよるが、少なくとも私の体験から言うと、今回、全く見ず知らずの人が

発言者	発 言 内 容
事務局	集まって5回でここまでできたということは、非常に素晴らしいことであったと思う。参加者アンケートにおいて、情報共有ツールについての意見もあったが、このようなツールは色々ありすぎて、通常大混乱するが、参加者が慣れない情報共有ツールを駆使しながら、一つ一つ積み上げて、私も驚くような仕上がりの絵本まで作り上げていた。最後のイベントについては、私は民博にいたので、このようなワークショップをやる際は、成功するように参加者を制限して、小さなお子さんがいる人は参加不可など、手段と目的が逆転することが多い。イベント当日の様子を見ると、かたや小さな子どもさんは泣いているし、かたや風船で遊んでいる子どもがいたりしていたが、まさにそれこそが文化的コモンズではと、私は感じた。 私の印象として、行政がこのような事業をやるには、相当の決断が必要だと思うので、通常ではできないチャレンジングなことなのではないか。専門部会委員の方から、次のステップに繋がるようなご意見もたくさん出てきたので、これらをまとめて、委員会として良い形で市長に答申をできればと考えている。答申書については、事務局と調整してまとめる予定である。 それでは、今年度最後の委員会となるので委員長として一言ご挨拶させていただく。各委員の皆様、公私何かとご多用の中、本委員会に出席、ご出席いただき感謝申し上げます。 特に専門部会委員の宮崎委員、常盤委員の二人におかれましては、年度末のお忙しい中、加えて急な委嘱にもかかわらず、短期間で素晴らしい事業評価報告書を作成いただき、あらためて深く感謝申し上げます。 お二人に作成いただいた報告書のご意見と本日委員の皆様からいただいたご意見を十分に踏まえ、次年度「つどい、つながる文化の会議」が推進されることをお願いする。また、次年度についても、「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について、継続して審議していく旨を事務局から伺っているので、その際は委員の皆様よりしくお願い申し上げます。 もう1点、余談ではあるが、本日の朝日新聞の電子版で見たが、おにクルがみんなの建築大賞を受賞されたということで、この素晴らしいニュースが書いてあった。おにクルを中心に、ますます茨木の文化施策が振興していくことを切に願っている。それでは事務局にお返しする。 ありがとうございました。出口委員長からご説明いただきましたように、答申書については、専門部会委員である常盤委員、宮崎委員お二人に作成いただきました事業評価報告書と、本日いただいたご意見を踏まえて、委員会終了後、事務局と出口委員長で調整させていただき、作成したものを委員の皆様にお示ししたいと思います。

発言者	発言内容
事務局	ここで、今年度最後の委員会となるので、市民文化部長の中井からもご挨拶を申し上げます。
中井市民文化部長	私からもお礼を兼ねまして一言ご挨拶を申し上げます。出口委員長をはじめ、各委員の皆様におかれましては、公私何かとご多用の中、今年度も熱心にご議論を賜りましたこと、心からお礼を申し上げます。また、専門部会員兼任の宮崎委員、そして常盤委員のお二人におかれましては、非常にタイトなスケジュールで事業評価に係る報告書を作成いただき、重ねてお礼を申し上げます。 昨年度、本委員会において、委員の皆様方に熱心にご議論いただき、「未来につながる『文化のまち』いばらき」を掲げる文化振興ビジョン（第２期）を策定することができた次第である。そして、今年度はそのビジョンを推進するための一つの取り組みである「つどい、つながる文化の会議」がコンセプトブック（絵本）の制作等を通じて、参加者間の交流が深まり、繋がりが構築され、共創による文化の活動がスタートできたものと考えております。 令和７年度についても、「つどい、つながる文化の会議」の事業報告書や本日いただきましたご意見を十分に踏まえて、事業を推進してまいりたいと思う次第である。委員の皆様におかれましては、今後とも、本市文化行政にお力添えをお願いいたし、お礼のご挨拶に代えさせていただく。
事務局	それでは、これをもちまして閉会とさせていただく。答申書案とあわせまして本日の会議録につきましても、後日メールにてお送りいたしまして、内容をご確認いただいた後に公開させていただく。 出口委員長をはじめ、委員の皆様本当にありがとうございました。今後とも市政につきまして、格別のご高配を賜りますよう、お願いしたいと思う。本日はどうもありがとうございました。 （閉会）